
僕たちの八重奏

MIDONA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちの八重奏

【Nコード】

N1475P

【作者名】

MIDONA

【あらすじ】

入学式当日に遅刻寸前で校門へ急ぐ小鳥遊宇宙。校門でぶつかった美少女にかけられた一言をきっかけに、失っていた大事なものを取り戻すこととなる。

小編集部門に出場することすら絶望的な人数で送る、ほのぼの吹奏楽ラブコメ！

2011年6月17日、改稿版の投稿を開始しました。

只今受験のため、2012年の3月までの長期休載中です。

Auf t a k t 序章・中3春（前書き）

こんにちは。 MIDONA です。

一応、僕の処女作に当たる作品です。

他作品を書いていて、後から読み返してみると、文章があまりにもつたなかったので改稿することにしました。にしても、僕自身の技量が大了たこと無いので、それでも読みにくかったり、改稿の意味が感じられなかったりしたらスミマセン。

もしよろしければ、感想などをいただけると嬉しいです。

ジミ's x 8 の方も絶賛連載中なので、そちらも合わせて宜しくお願ひします。

Auf t a k t 序章・中3春

これで何回目だろうか。

指示されたところを弾き終え、鍵盤から手を離すと、部屋に静寂が訪れた。

僕は今にも出てきそうな涙をこらえ、先生と向き合う。

「もっと早くクレッシェンドをかけ始めろ、と言っているのが分かるのか！ もう一度だ！」

僕は返事もせずに再び鍵盤に手をおく。

一度大きく深呼吸をして、同じところを弾き直した。

中音域で奏でられていたメロディーが音階に沿って上へと上がり

——
パーン

よく通る音が響き、上がりきる前に演奏が止まった。

僕は左頬に手を当てて、先生を見る。当てている手の下は、まだ熱を持っている。

「もっと早くだ！ もう一度やってみる！」

先生の怒声を聞き、鍵盤に向き直る。すると、視界がぼやけてくるのを感じたが、目をこすって視界をはっきりさせてから、鍵盤に手をおく。

今度は間をおかず、直ぐに弾き始めた。

叩かれたことで何かが吹っ切れたんだと思う。

そのとき、僕は先生から注意されてきたことの一切を無視していた。というより、頭から抜けていた。

曲が流れるのにつれ、心が入り込み、体が自然と揺れ始める。

さつきと同じメロディーを、さつきよりも明るい音色で奏でいき、先ほど同じ上昇音階に入る。

盛り上がりを強調するために、最初は小さく入りそのままこらえる。上に行くに従って、自然とクレッシェンドの大きさが大きくな

り

「何度言ったらわかるんだ！」

頬を叩かれる音と先生の怒声が、わずかに残った音色を打ち消す。だが、僕は痛みも感じず、感情にまかせて立ち上がった。

「僕はこう弾きたいんです！」

無意識に手を動かしながら主張した。

「だから、おまえの意見など聞いていない。お前が楽しくなろうが、何だろうが関係ない」

先生が鬼のような形相になり、話し出した。

「私の言うとおりに弾けば必ずコンクールでいい結果が出せる。この前のコンクールも、私のいうことを無視してひどい成績をとってきたんだろ」

自分ではそれが原因だとは思っていないが、コンクールの結果が悪かったのは事実なので、とっさに言い返せなかった。

「コンクールでいい結果を残す。音楽とはそれが全てで、唯一無二の目的だ。分かったら、もう一度だ」

「分かりません！」

先生が椅子に座らせようと、僕に伸ばしてきた手を振り払う。

「それがピアノだというのなら、僕はもうピアノを弾きませんから」
それだけを言い残し、僕はレッスン室を後にした。

第一小節　春の日の出会い

4月初旬の平日の昼下がり、僕、小鳥遊隆弘たかなし たかひろは慣れない通学路を全力疾走していた。

自宅で昼食を食べ終え、新品の自転車に跨またがったところまでは順調だった——と思う。

中学の時に使っていたものより、サイズもランクも上のものにした自転車の乗り心地に酔いしれていたところ、よりによって画鋏を踏んでしまった。すると自転車は、今日おろしたばかりにもかかわらず、タイヤの空気が抜けて使い物にならなくなってしまった。

そのときに場所を確認すると、通学路の約半分を過ぎてしまっていて、近くにバス停も無かったため、走っての登校することになった。

正直、「不幸だ」と叫びたくもなるものだが、色々あるので自重しておく。著作権の問題もあるが、そんな事をしてヲタクと見られて、彼女を作ってリア充する、という僕の夢をつぶしかねないかな。

気づくとやっと校門が見えてきた。

左ポケットから携帯を出して時刻を確認すると、ちょうど12時29分に変わったところだった。

たしか、12時30分に教室に入っていればいいはずなので、このままいけばなんとか間に合いそうだ。

ラストスパートをかけようと気合いを込め、勢いよく校門を曲がったところで——

ドンッ

何かにぶつかったような衝撃とともに、体が後ろに倒れた。

わけが分からず正面に目を向けると——

「ててっ……」

同じく地面に腰を落としている少女がいた。

大きな目を初めとして、整った顔立ち、腰のあたりまで伸びたワンピースのかかったふんわりとした髪、スカートから覗く柔らかそうな太股。おまけに、胸はE、いやF……ともかく、とても豊満でとても柔らかそうで——つまり、目の前にいたのはただの少女ではなく、美少女だった。しかも、アイドルをやってます、と言われて疑いもせず信じてしまうほどの。

僕が見とれて動けないでいるうちにも、目の前の美少女は地面に手をつけて立ち上がるうとしている。

その途中、ふわっと少女のスカートを持ち上げるように吹き抜けた風が、僕の鼻孔へ少女のいい香りを運んでくる。スカートの中は……見えなかった、残念ながら。

やがて風が吹き止むと、少女がスカートを押さえていた手を、まだ地面に座ったままの僕に差し出して、口を開く。

「あの……よかったら私と——」

告白キター（・・）

このシチュエーションで、この言葉に続くのが『付き合ってください』以外あるだろうか。いや、あるわけがない。それは古今東西どこでも当てはまる一般常識だ。

もちろん答えは『Yes』と答えさせてもらおう。

そう心に決めて、僕が改めて少女を見ると、少女はその続きを紡ぎ出した。

「——吹奏楽やってみませんか？」

「はい、喜んで！」

その直後、よく通るチャイムの音があたり一面に響きわたった。

担任（じやんいん）の教師が入学式の簡単な説明を終えると、入学式までは自由にしてよい、というニュアンスの言葉を残し教室を去っていった。

それにより、教室内は友達争奪戦（？）を開始する女子や、同中や同じ部活など顔見知りで集まる男子、他のクラスから出張して来ている人などが各々話をしている。

その中でも一箇所、特に賑わっているところがあった。十人ほどの男子がある机に集り、特売品を取り合う主婦のごとき目をして中心にいる人間に言い寄っていた。

その中心にいる人間というのは――言わずもがな、今朝出会った美少女、杜若彩耶奈（各自に配られた座席表で確認済み）である。

クラスをざっと見た感じ美少女と呼べるレベルの女子何人かいるのだが、杜若はその中でも頭一つ抜けていた。それゆえ、彼女を自分のものにしようと思った男子が詰め寄っているのだろう。

しかし、当の杜若はというと、質問をされたりとかメアドの交換のために携帯を差し出されたりしているのに、慣れていないせいかわりに反応がたどたどしく、ほとんど意思疎通ができていないようだった。

そんな中、僕はというとその輪に入っていく気にもなれず、ひとり机で書類に目を通す振りをしながらその様子を眺めていた。

ただ単に入っていく勇気がないというのもあるのだが、それ以上に今朝彼女にかけられた言葉が、妙に腰を重くしていた。

――吹奏楽をやってみませんか？

その言葉に、僕は「はい」と即答してしまった。理由は告白されたのと勘違いして答えてしまったからだ。
しかし――

『吹奏楽』

その言葉が頭の中に引っかった。

『吹奏楽』について詳しくは知らないが、『楽』という文字があ

ることからすると、音楽の一種だろう。女子（それも美少女）と一緒に部活をやること自体はいやではないし、というより夢にまで見た展開だ。

でも、その内容が音楽となると話は別だ。といっても音楽が嫌いなのではない。勉強の暇つぶしに、ウィーン交響楽団のCDとか、母さんのソロのCDとか聞いたりしているし。

昔起こったあることを境に、楽器演奏を自分でも無意識のうちに敬遠するようになった。

とはいっても、中学の授業でリコーダーやギターなどは弾かされていたし、ピアノ以外だったら問題ない……と思う。

でも、真面目に音楽に取り組むことに、多少なりとも抵抗感があるのは確かで、何となく話を切り出す気が起こらなかった。

そうして、しばらく眺めていると、一瞬、杜若と目があったので手を振ってみた。

すると、向こうも笑顔で微笑んだ後、周りの男子に断ってから廊下に出て行った。おそらくトイレだろう。

見るものも無くなった僕は、改めて入学式についての紙を見る。

今朝、杜若とぶつかった後、チャイムが遅刻したことを告げていたので、急いで教室に向かった足でそのまま、先生の指示に従い職員室に向かった。そこで遅刻者カードなるものを書かされ（遅刻理由が寝坊か通院しかなかったので仕方なく通院にチェックした）それを学年主任に提出、及びありがたい言葉をいただいていたため、入学式についての説明を聞けなかったのだ。

特に分らないところもなく、最後まで読み終えたので、伸びをしようとしたところ――

「えっと……小鳥遊隆弘君でいいんだよね？」
たかなし たかひろ

「へ！？」

後ろから予想外の声が聞こえたので振り返ると――先程まで僕が眺めていた美少女、杜若彩耶奈が立っていた。

「あの、よかつたらお話したいんだけど邪魔かな？」

「いや、全然！」

そんな予想もしていなかった発言に、断る理由も無いので、もちろん承諾の意を示す。

立ち話をさせるのも悪いので、自分が座っていた椅子に座るように勧めると、杜若は何故か苦笑いしてから空いていた隣の椅子に腰を下ろした。

せっかく好感度を上げようと行動したのに、どうやら失敗だったらしい。乙女心は難しいな。

僕がもう一度自分の席についたところで、杜若の方から口を開いた。

「杜若彩耶奈です。改めてよろしく！」

「小鳥遊隆弘です。こちらこそよろしく」

名前は座席表で確認したとおりだったようで、お互い無難に自己紹介を済ませる。

すると、杜若が少し何かを考えてから口を開いた。

「それじゃあ、タカ&タカだね！」

「え……？」

余りに突然な内容の発言に反応できなかった。

しかし、何ですか？ そのブームの過ぎた芸人みたいな名前は。

ここは『欧米か！』とでも突っ込めばいいのだろうか。

そんな思考を巡らせているうちに、杜若が申し訳なさそうに口を開いた。

「……ごめん。小鳥遊隆弘だからそうなるかなって」

「うん」

「えっと、そう呼んでいい？」

「普通でお願いします」

「了解」

再び訪れる沈黙。

お互い会話が得意なタイプではなさそうなので、仕方がないことかもしれないが、相手の好感度を上げるために何かこちらから話題

を振った方がいいだろう。

そう思い、何か話題がないかと周囲を見渡す。

すると、一つ話題になりそうなネタを見つけた。

「杜若」

「ん？」

杜若へと向き直り、こちらからの呼び方を確かめる意味で呼びかける。

ここで、下の名前で呼び捨てにしたり、ちゃん付けで呼べればよいのだが、その度胸が無いので仕方がない。下手なこととして好感度を下げるよりはましだし。

「あいつら、ほつといて大丈夫？」

「あいつらって？」

僕が杜若の席の方を視線で示すと、杜若もそれを追って後ろを向く。

その時に、杜若の席に集まっている連中と目があつた。すると、そいつらが睨みつけてきて、背中に妙な寒気を感じる。

しかし何だろう、この快感は。去年からずっと夢見てきたが、やはり気持ちがいい。あ、もちろん優越感故だ。決して、マゾだからではない。

「私、人見知りみたいで……。あの子達には悪いんだけど、初対面の人、特に男子が苦手で。特に男子だと……」

その後、杜若が示している対象を確認してから、本当に申し訳なさそうな様子で理由を話す。

それに何となく返事をしたが、一つ疑問に思い、

「僕も今日が初対面だけど……。それに、男子だし……」

「でも、吹奏楽やってたんでしょ？ だから仲間意識があると言うか……。それじゃあダメかな？」

「全然」

杜若があまりにも無垢な笑顔で聞いてくるので、反射的に返事をしてしまった。

しかし何だろう、この罪悪感は……。

こうも美少女に好意的に接されると、ますます「間違えました」なんて事実を打ち明けにくくなってくる。

「えっと、ほかの女子の友達とか作らなくて大丈夫？」

バカ、僕はなんてことを聞いてるんだ。

いくら現実から逃れるために振る話題だからって、こんなこと言っ
て『それじゃあ行くね』とか言われて、会話の機会を逃すかもしれない
ではないか。

僕が心の中で頭を抱えて悶えていたが、その予想は良くも悪くも裏切られた。

「それよりも、一緒に吹奏楽をやる子を集めないといけないから」

「ガンバツテネ」

「うん！」

予想もしていない内容のリターンに、思わず返事が棒読みになっ
てしまう。

でも、何で離れるようにしているのに、この話題に戻ってくるの
だろうか。というより、何を振ってもこの話題に帰結する気がして
きた。あくまでも、気がするだけだけど。

あと、杜若の笑顔が凄まじい。

「で……、杜若は何の楽器やってたの？」

もう、吹奏楽の話題から離れられそうにないし、杜若に喋り倒し
てもらい、タイムリミットを待つとしよう。

「クラリネットだよ」

杜若が相変わらず太陽のような笑顔で答える。その後、吹奏楽の
話題を振られた事が嬉しかったのか、特に迷わず口を開いた。

「小鳥遊君は何の楽器やってたの」

「……」

まさかの作戦失敗でした。

もちろん答えられずに口をパクパクさせる僕。

やはり、彼女の中では僕は吹奏楽経験者になっているようだ。

「……えっと、もしかして未経験者？」

「……（コクコク）」

杜若の、僕の内心を察したような質問に、口を開けないながらも恐る恐る首を縦に振る。

しかし、彼女は気を悪くした様子はなく、笑顔のまま尋ねてきた。

「それじゃあ、何で今朝、私の勧誘に乗ってくれたの？」

「えっと……」

僕は杜若から視線を逸らし、返答内容を考える。

まさか、事実を告げるわけにもいかないし。というか、そんなことをしたら、いろんな意味で高校生活が終わってしまう。そんなのは、嫌すぎる。

こんな好意的（他意はない）に接してくれる相手に嘘をつくのはしのびないけど、本当のことがいえない限り嘘偽りで切り抜けるしかない。

そうおもい、僕が頭を抱えていると、

「まさか、告白と勘違いして返事しちゃったとか？」

「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ……」

余りにも確信を突かれすぎて、思わずむせてしまった。

その間にも、杜若は「大丈夫！？」と言いながら、僕の背中をさすってくれている。その手からは、布越しなのに温もりが体に伝わってくる気がして、咳は早々に落ち着いた。

まあ、杜若がさっき聞いてきた時も、「冗談を言ってるような口調だったし、バレてはいないと思うけど。」

「小鳥遊君は優しいから、困ってる私を見て協力してくれたんだよね」

「……うん」

杜若の笑顔を見ると、どうしても否定することが出来なかった。う、ますます罪悪感が……。

そんな僕の内心を察してか、杜若が顔を一瞬曇らせ、

「でも、いいの？ 無理しなくていいよ」

「もちろん！ 杜若のためだし」

「良かった——」

と、杜若は安堵した表情になる。

だって、ここで断ったら、今後一切口を聞いてもらえない気がするでもないし。

「もし断られたら、話できる相手なくなっちゃうから」
「やっぱり。」

まあ、なるようになるだろう。もし無理だとしても、しばらく活動して仲良くなれば、この人見知り吹奏楽娘でも見捨てたりはしないだろう。

最低、つきあい始めてから止めればよい。

再び杜若が話し始めようとしたところ、廊下から顔を覗かせた男性教諭が、体育館に移動するよう指示する声が教室の喧騒に混じった。

確認の意味を含め携帯を取り出して時間を見ると、入学式開始の五分前だった。周りの生徒も順次移動を始める。

「小鳥遊君、行こう」

「おう」

そんな杜若の声に答え、2人で並んで廊下に出る。

こうやって女子と2人で並んで歩くのには、心地よい充実感がある。

後は……

「手をつなげたら最高なんだけどな」

「え！？」

突然杜若に驚かれた。

もしかして思考がだだ漏れになってたとか……。

「えっと、それじゃあ繋ぐ？」

「へ！？」

今度は僕が驚いた。

「いいの？」

「小鳥遊君が、そうしたいなら」

何でこの子はこんな事をさりとと言えるんだろうか。

字面だけ見ると、微笑ましいやりとりに見えるが、杜若は一切恥じらう様子がない。夢にまで見たシチュエーションなのに、何か違った。どうやら、恥じらいつて大切にしたいです。

「どうするの？」

僕が黙っているの、杜若が返事を急かしてくる。でも、恥ずかしい故ではなく、単に腕が疲れたらしい。

「えっと………やっぱ、いいや」

「うん」

しかしというか何というか、杜若からは残念がる様子は無かった。そこから察するに、杜若は女子同士で手をつなぐのと同列に考えていたらしい。僕が男子として見られていないのか、男女間の関係に疎いのか。後者であることを願うのみだ。

にしても、ここまで無頓着な高校生って、実際にいるんだな。悪い男に引つかからなければいいけど。

そんな僕の不安をよそに、杜若は部活に対する期待を話していた。この二つを考えると、部活に入る交換条件に、脱衣とか迫っても受け入れそう……。さすがにそれはないか。

と、考えながらも、それを自信を持って肯定できない自分が怖かった。

暑い、蒸し暑い、とにかく暑い。

体育館の中は春先であるにも関わらず、もの凄い熱と湿気に包まれていた。そんなことを考察する間にも、首を一筋の汗が流れ、背中にも到達する。それと同時に、背中にも何ともいえない寒気が走った。

正直、この高校の入学式の短さには驚かされた。無駄なことはない、というのが学校の方針なのか、祝電披露や来賓挨拶などを一切行わず、校歌・国歌の斉唱、校長の言葉、新入生宣誓のみしか行

わず、全体で十五分もかからずに終わった。

その後は、教室に戻りテストを三教科ほど（国・数・英）受けさせられた。問題内容が春休みの宿題と同じ内容だったので、平均点はわからないが、点数的には悪くないと思う。

教科間の休み時間は、杜若が部員勧誘のために教室中を駆け回っていたため、杜若との会話は無かった。ちなみに、結果は全くふるわなかったそうだ。

その間に、僕も男子の友達を作ろうと試みたが………失敗した。今朝、杜若を独り占めしたことを根に持たれたらしかった。

そんなことがあり、今は再び体育館へ移動して、部活紹介を受けている。

県内屈指の強豪である野球部のキャッチボールをはじめとして、テニス部の素振り、バスケット部のシュート練など、各運動部が上げた不快指数も下がらぬうちに、後半戦である文化系の部活紹介に突入し、現在後半戦半ばまで来ていた。

この高校は全部で五十弱の部活があり、運動部と文化部は半々。その中でも、特に音楽部の数の多さが目立つ。吹奏楽に弦楽、ギターにマンドリンと部活一覧の下の方を占領している。残念ながら（？）、合唱部や軽音楽部は無いらしい。

そんな中、音楽系のトップを切ったのはギター部だった。

直前の部活がステージを降りると、慌ただしく椅子を並べ始める。しかも、その数が結構多い。椅子を並べ終わると、そろそろとギターを持った人々がステージにあがった。

その後、各自椅子の微調整を行い、指揮者の男性教諭（恐らく顧問だろう）が観客に頭を下げる。

そして、奏者に向き直り目配せをしてから、指揮棒を構える。そして――それが振り下ろされた。

その音楽を聞いて――僕はある問題に気づいた。そのレベルの低さだ。低い、と言っても高校生としては普通くらいだろう。とはいえ、アタック、リリース、クレッシェンド、デクレッシェンド、ど

れも揃っていない。

それ故に、音楽が観客席に届いてくるはずもなく、会場の喧騒も相俟^{あいま}って、目的もない単なる音の混ざり合いになってしまっていた。あの音の中に何日もいたら、正直頭がどうにかなってしまいそうだ。杜若には悪いが、部活での音楽は遠慮せざる終えないかもしれない。あのレベルだと、数ヶ月だけ活動、というのも勘弁願いたい。それも、吹奏楽部がこのレベルなら、の話だが。まあ、期待するだけ無駄だろう。まだ高校生活は先が長いんだ。他の女子を彼女にすればいい。

そんな思考のうちに、曲の題名も思い出せないままギター部の紹介が終わった。

その後、マンドリン、弦楽と続いたが、期待を裏切らなかった。もちろん、悪い意味で。

そして、順番通りなら、次はやつと吹奏楽の番である。

弦楽部と入れ替わりに、楽器を持った生徒がステージにあがる。

全体で五十人ほどいるが、男女比は女子が極端に多かった。

続いて持っている楽器に目を向けてみる。前列から、クラリネット、オーボエ、フルート、サクスなどがいる。後ろの方は見えないうが、チューバのラッパ（花弁のような形に広がった部分）の先端が見えた。そして、向かって左側には打楽器^{パーカッション}がいくつか置かれている。

それを見て、一つの情報が頭に引っかけた。吹奏楽の正体（？）についてだ。

オーケストラは大別すると弦楽器、管楽器、打楽器の三つで構成される。その中でも特に、弦楽器の調達、維持には想像を絶する程のお金がかかる（といっても、その他の楽器も額は大きいが……）。それ故、資金の少なかったある交響楽団が、弦楽器抜きで演奏したのが起源とされている。ヨーロッパ各地で様々な方法で始められたらしいので、別の起源も存在するのだが。

まあ、簡単に言ってしまうえば、管打楽団ということだ。

その予想はあたっていたようで、弦楽奏者が上がって来ることなく、演奏者の入場が終わる。それを確認すると、指揮棒を持った女性教諭（こちら恐らく顧問だろう）がステージに上がり、こちらに向き直ると静止した。

「次は吹奏楽同好会です」

という放送の後、顧問（暫定）がお辞儀をし、指揮棒を振り上た。あれ？ 今、『同好会』と言ったのは気のせいだろうか……。まあ、杜若に確かめれば分かるのだが。

そんなことを思っているうちにも、音楽が始まった。

木管の陽気（なんだろうな……）な前奏から始まり、トランペットのユニゾン（だと思う）のメロディーに移る。

曲は『上を向いて歩こう』だろう。

ここまで聞いて、だいたいの実力は掴めた。正直に言うと、飛び抜けて下手に聞こえる。

音に関してだけ言及すれば、個々の楽器の音量が大きいので、力押しで観客席まで届いている。

しかし、その他の部分に関しては、その音量が仇となってしまうている。

というのも、管楽器は大きな音量を出しやすい楽器（トランペットなど）と出しにくい楽器（フルートなど）がある。で、各楽器の奏者が遠慮をせずに吹いている為、メロディー部分が伴奏に吞まれている、逆にメロディーが飛び出したりしまっているのだ。

それ故、曲全体の輪郭が見えてこない。

また、音程にも気を使っていないようで、トランペットなどのユニゾンですら届いてこない。

なので、全てが『らしい』等の曖昧な表現になってしまうのだ。そう考えると、楽器の特性の問題で、特筆して下手なわけではないのかもしれないが。

その後もトランペットとトロンボーンデュエットの二重奏などもあったが、特に印象を変えることなく演奏が終了した。

指揮者が再びお辞儀をした後、まばらな拍手の中で演奏者が退場していく。

これで結果が出た。

率直に言つと、杜若と高校で音楽をやることは難しい——否、無理だ。

理由は色々あるが特に述べる必要は無いだろう。気持ちの入らない音楽なんて、やらない方がマシなんだし。

吹奏楽は最後なので、ようやく、この熱気から解放される。

自然に漏れた溜め息を感じながら、前を見る。すると、締め挨拶のためか、女子生徒（生徒会役員ではないだろうか）が一名、マイクを持ってステージにあがっていた。

その生徒がステージの真ん中——を通り過ぎ、だいぶ右手側につくと、ステージの壁に青一面の映像が映し出される。映写機の待機画面だ。

続いてパソコンの画面が現れ、デスクトップのとあるフォルダーが開かれ、中のデータが露^{あら}わとなる。

その中の一つをクリックすると、同時に動画再生ソフトが立ち上げられた。

映写機が忙しく熱を逃がしながら映し出している画像に目を向けてみる。その内容は、何かの演奏会のビデオらしく、その明暗からステージや観客席をみることができた。

「次は吹奏楽部です。お願いします」

相変わらず騒がしい会場に、マイクからの声が飲まれた。

しかし会場の様子など気にすることなく、再生のボタンが押される。

スピーカーからは、画面内のざわめきが流れた。それを見るに、単なる録画映像らしい。

まあ、そんなことはどうでもいいが。

特に演奏にも興味はないので、視線を手元に落とし——流れてきた演奏に我が耳を疑った。

それを肯定するように、一切のざわめきが会場から姿を消している。

唯一響きわたる音は、決して音質がいいとは言えるものではない。しかし、そんなことは気にせず、その明らかな格の違いを見せつけていた。

曲目は『情熱大陸』のメインテーマ。
やっっているのは普通のサククス四重奏。カルテット

にもかかわらず、それはお互いを生かし、支え合い、時には前に出て、演奏者四人全員で一つの音楽を紡ぎ上げている。

それはガラス細工というか、なんと言うか、触るとすぐ壊れてしまいそうである……そんな絶妙なバランスを保ちながら曲が流れていく。中でも一際目立つソプラノサククスの音色は特に美しく、まさに時が止まっているかのような錯覚さえ覚えた。

会場が息継ぎもせずに聴き入る中、曲はパーカッションのセツシヨンへと移っていく。

そこまできて、ようやくつけた久しい呼吸により、会場の緊張感がゆるみ、部活についての説明が始まった。

だが……

説明が、邪魔だ。

より正確には説明が演奏をかき消していて、せつかくの演奏を落ち着いて聞くことができなくなっている。

会場は一気に落ち着いた雰囲気に戻ったが、もちろん裏では演奏が流れ続けている。その緻密さは合奏となっても崩れることなく、各自が各おのの役割をしっかりと理解し、相変わらずの美しさを保つた。前奏の掌握力こそ無いが、演奏者と楽器が増えた分、音量や多彩さを増し、音楽としては一段も二段もよくなっている。

その後も、クラリネットの流れる主線や、パーカッションのアクセントなどがあり——いつの間にか演奏は終了していた。

心に残ったのは——心地良い余韻だけだった。

もちろん、部活の説明なんて、頭に入っていない。

「これで部活紹介は終了となります。仮入部は今日から可能ですので、積極的に参加してみてください。それでは――」
そんな司会者の言葉で、部活紹介は終了となった。

「小鳥遊君！」

部活紹介終了後、そのまま流れ解散となったので、一人で体育館を出て数秒たったところで、後ろから声をかけられた。
振り向くと予想通り、杜若が立っている。

「おう、杜若。どうした？」

「あの……さ………」

杜若の方に駆け寄りながら尋ねると、杜若は手を後ろで組んで後ろめたそうにモジモジしている。

その顔を多少赤くして軽くうつむいている様子は、いつものギヤップもあつてか、いつも以上に可愛く見える。

「この後どうする？ やっぱり、親御さんと帰る？」

「いや……。親、来てないし………」

「あ、ゴメン………」

杜若の表情がうつむきがちになる。

まあ、来てないと言っても、別に両親が離婚しているとか、親が死んでしまっていないとか、親と縁を切つてるとか、そんな話したくない理由では無い。

ただ単に、父親は指揮者、母親はソプラノ歌手として世界的に有名なため、休みが取れず現在進行形でヨーロッパで演奏しているからだ。

杜若に、その旨（話す必要は無いので職業などは伏せた）を話すと、杜若は「よかった………」と落ち着いた顔になった。

「杜若は親御さんは？」

杜若が微笑んだまま、なかなか動く様子が無いのでこちらから話題を切り出した。

「先に帰ってもらっちゃった」

杜若が軽く愛想笑いをしながら答える。

杜若も一人なら、この後一緒に食事でも……、となればいいが、無理なんだろうな……。杜若の性格的に。こちらから頼めばOKしてくれるかもしれないけど。呼びかけてきたってことは用事があるんだろーし、それを無視するなどという無礼なことは流石にしない。さすがまあ、用件は大体分かるけど。

「よかったら、この後部活見に行かない？」

やはり、予想通りだった。部活とは間違いなく吹奏楽部（もしくは同好会）だろう。

同好会だったらな……。という不安があり少し悩んでいると、杜若はえさを前にした犬のような様子でいて、それがまた可愛い。

さすがにその様子を眺めたままではいるわけにもいけないので、回答を述べた。

「いいよ」

「ありがとう！」

よっぽど嬉しかったのか、回答を聞くなり杜若は軽く飛び跳ねた。そのときに、スカートが軽く舞い上がり柔らかかそうな太ももが割ときわどいところまで見えたが、それを眺める度胸は残念ながら持ち合わせていないので、目を逸らしながら杜若の後ろ側を見る。その視線の先は、校門とは反対側の方向で、吹奏楽部の部室が見えている。『同好会』の方は校舎で活動しているらしいが。

同好会である可能性を未だに否定できないが、もしそうだったら、その時は理由を話して断ればいい。最低、杜若に縁を切られても、仕方がないと思う。

それに、少し気になるのだ。あんなに美しい音楽を作り出せる練習、というものが。

そんなことを考えていると、不意に右手に温もりを感じた。不思議に思っ手元を見ると、杜若の右手に握られていた。

「おい、杜若……」

「早く行こう！」

「おい！？」

その幸福に浸っている暇はなく、杜若は校門、つまり、部室とは逆側に向かって走り出した。

第一小節 春の日の出会い（後書き）

こんにちは。

お久しぶりです。MIDONAです。

読んでいただきありがとうございます。

活動報告でも何度が言ってるかと思うのですが、MIDONAは受験生です。

それ故、来年の三月までは超不定期掲載となってしまうことをお許しく下さい。

下手をすると2ヶ月以上の未投稿期間を作ってしまう可能性もありますが、決して連載を中断したわけではないので、長い目で見ていただけると嬉しいです。

とはいえ、この小説は小さな待ち時間や休み時間などの暇な時間を使って執筆しているのでよくちよくあげられるとは思いますが……。

基本、活動報告はこまめに行進しておりますので、細かい執筆事情やMIDONAの状態については活動報告をご覧ください。

あと、もう一つの連載中作品である『ジミ's x 8』も本日最新話を公開いたしましたので、よかったらそちらもあわせて宜しく願います。

僕八、ジミ's共に感想をいただけたら光栄です。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1475p/>

僕たちの八重奏

2011年11月16日18時50分発行